

内観ニュース

第17号

発行所
日本内観学会

〒565

大阪府吹田市山田丘1-2

大阪大学人間科学部

教育心理学研究室

【特別寄稿】

いじめ問題と内観

* 土屋 守



昨年十月末内観療法ワークショップ・イン・北陸と石川県で連続でいじめの講演を行い、幸いに参加者の好評を得た。この時期に私は講演や拙著「私のいじめられ日記」〔五〇〇人のいじめられ日記〕(青弓社刊)の中で、一昨年頃から頻発しているいじめ死をこのままやむやみに「大人たちが『死にいたる現代のいじめ』の本質について理解しないかぎり学校での『いじめ死』は際限なく続くだろう」と警告し続けた。内観療法ワークショップでの講演の後、いじめ死の頻発と内観療法との関わりについて再度考察してみる必要があると考えた。

「葬式(じつじつ)」で有名な鹿川君の第一審で裁判所が拙劣な「いじめ観」を提示して世の批判を浴びて以来、裁判所では「いじめ」をあいまいに「非行」として扱い続けている。これは見逃せない司法の「逃げ」だと思うが、多くの「死にいたるいじめ」には「非行」の要素があることも事実で、吉本伊信先生が内観をまず少年の「非行」に適用された歴史から考えれば「いじめの加害者における内観の位置付け」は明らかである。

特に「いじめ死」は学校という教育現場で起こるため、教師は加害者と目される子供に対しても、その行為を「取り調べる」のではなく「聴かせて頂く」という態度を堅持することが必要である。

そして、真実が明らかになった後は、人権侵害は断固して許さないと教育をするべきである。「五〇〇人のいじめられ日記」の中で「学校の対応の根幹を『聴き取り』としたのも内観を念頭に入れたものである。心に傷を負った被害者の場合はどうだろう。「私のいじめられ日記」で明らかのように、私の娘は「内観をしているし、お茶を『取りにいかせていた』という気持ちでいっていた」という態度に徹して、被害をうけている。それほどこの学校における人間関係は歪んでいた。

このことについて娘が現在どう思っているのか、私はまだ聞いていない。娘の心の傷を思うと聞く勇気がない。ただ、この本の「おわりに」の「私のまわりにいる全ての人へ心からの『ありがとう』を伝えたいのです。この事件で私は本当に皆さんの方々の心の暖かさを知りました。それは私が受けた心の傷と同じくらい深く、そして決して忘れてはいけないことだと思います。」という娘の言葉は内観的だろう。

この「人々に支えられて」という点は私も同じ思いである。しかし三年の間、いじめられた娘を抱え、私の家庭は死に物狂いの闘いの日々であった。「いじめられて死



第6回内観療法ワークショップ
において講演の筆者

んでいった子供たちのことを思えば耐えられる」と家族がお互いに確認しあわなければ一日といえども過ごせないギリギリの闘いであった。

このように、いじめられ、心に傷を負った被害者や家族の内観について私の結論は出ていないが、人権侵害としてのいじめ行為の減少という観点について以下のようなヒントを得た。

昨年十一月末、愛知県の中学生、大河内君のいじめ自殺をはじめとして、全国で連続して子供の「死」が起り、大きな社会問題となった。大河内君の死は私がいじめ問題の第三作「いじめないで」(青弓社)を出版したと同じ時期に起こった。私が警告し続けたことが不幸にして現実となったものである。大河内君の死が報道された時、はじめ、学校や「加害者」とその家庭に対する大衆の非難が中心であった。しかし、いじめを精神科医として考え時、もうひとつ強調したいことは、いじめに限らず、今の多くの子供達には「生きていても虚しい、消えたい」という感情が底流にあることだ。この感情が歯止めのないいじめ行為と合致した時に子供はその生死観や「うつ状態」も手伝って「死」のハードルを越えてしまう。昨年暮れに報道された小学四年の「人生が虚しい」という遺書を残しての自殺や今月六日の小学六年の「こんな人生に耐えられない。これで自由になれる」という遺書を残しての自殺がそれである。子供の底流にある「虚しい、消えたい」という感情抜きに「自殺の流行」はあり得ない。大河内君の自殺以降、多くの子供が自殺し世論が湧いた。そこに阪神大震災が起きた。この二つの「死」を伴う事件は日本人の心の在り方が問われたということと共通点がある。人々は「いじめは減っている」「関西に地震はこない」という根拠のない非科学的な神話を信じさせられてきたが、大河内君が亡くなってから、また、阪神関西大震災が起こってからこれらは神話に過ぎず「死」は意外に身近にあることを人々は痛感した。

「地震」神話が関西の防災意識を貧困にしたように「いじめ減少」神話は各分野の人々の様々な視点からの研究が豊富な不登校などに比較して、死にいたる現代のいじめの研究の発展は坊げられ貧困である。阪神大震災は大惨事であり、メディアが震災報道を中心に据えるのは当然である。そう認識する一方、昨年までの我々の努力にもかかわらず動くことのなかった「いじめ死」への教育行政や世間の認識が、大河内君の死という犠牲に動かされ、国会で論議されるなどようやく改善されかけたのが、震災報道によって覆い隠され「元のもくあみ」になりはせぬかと危惧していたが、震災への対応の合間を縫って多くのメディアが、「精神的瀕死状態」もを含む「死に至るいじめ」を「点」(事件)としてではなく「線」として取り上げた意義は大きい。

また、それまで、不登校などの講演には後援者になってくれたが、いじめの講演となると後援者となることを避けた教育委員会など教育行政が続々と自ら講演や研修会を主催し、講師依頼をしてきている現状は、一昨年のマッド死を「いじめ死元年」とすれば、今年はいじめ教育元年」と言い得る変化だと実感する。また阪神大震災への救援活動の中で、崩壊したかみえた社会教育が復活する兆しがみえ、他人、特に弱者への思いやりや物の有りがたみを子供たちが身に染みて感じる傾向が出てきたことは不幸中の幸いである。

家庭、学校、社会の三教育のうち、社会教育が弱化したことが子供社会を急激に変容させ、他者への思いやりに欠けた子供が増えた結果「死にいたるいじめを生む」一因になったことを痛感していた時期だけに、今回の大惨事によって子供たちの意識の中に内観という「自分が勝手に生きている」のではなく「多くの人々に支えられて生かされている」という自覚が芽生えつつあり、この自覚が「いじめ死」や子供の自殺の予防につながるかもしれないと期待したい。(京都心身学習総合カウンセリングルーム)

【第六回内観療法ワークショップ・イン・北陸印象記】
パネル討議

「『生』の役割『死』の意義」に感銘

甲南大学大学院 内海 宏一郎

大阪からの夜行列車を高山駅でのりかえ、立山連峰のふところへ延びる富山地方鉄道の車窓からの眺めに心踊らせ、十月二十二日の早朝立山駅に到着した。秋晴れの美女平や日本一の落差を誇るといふ称名の滝を観光。人間をつつみこみ生かしてきた自然とじっくり一体となれるこの地は「内観」について思いを巡らせる絶好の場所と主催の方々に感謝しつつ、会場の富山厚生年金休暇センターへと向かった。

午後一時の開会式の後、入門者コース、中級者コースに分かれ、講義、シンポジウム、パネル討議、体験発表、事例検討、特別講演、ナイトセミナーなど翌二十三日昼まで豊富な内容が準備され、夜には希望に応じ恒例の内観実習も用意されていた。

そのなかで特に「パネル討議『生』の役割と『死』の意義について」が印象深く以下これについて報告させていただく。まずはこのテーマの大きさに驚くが、内観を通じてだからこそ、このような問題を正面から論じ合える



大勢の参加者で会場は熱気に包まれた

のだと思うとうれしいような気がしてくる。

まずターミナル医療の現場からの報告では、死を見つめねばならない他人と正面から向き合うことの苦しさのなかで、患者、治療者双方がそれを避けないで歩むことにより生への態度がともに高次に導かれてゆく貴重な経験が語られた。

そして次の悪性腫瘍の診断を告げられた女性の体験報告は、恐らく今回のワークショップで最も多くの人のところに新鮮な力を吹き込んだ時間になったと思われる。語り尽くせぬ数々の精神的身体的苦痛のなかから、「神様がどう耐えるか見てるんだ。このままじゃ死ねない、きれいなところになって死のう」との決意して内観。深い感謝の念、報恩の願い。病氣も小康を得、仕事に戻る。

「来てくれたひとにこころから安らいで欲しい。コーヒーの味がわかることをしあわせだと思ふ。本当の愛情だけをみて生きてゆける。ウソで生きたくない。本当に病氣になってよかったと思う。毎日を楽しんでいいる。少しでもいいひとで死にたい。」少しも肩に力の入った様子はなく、これらの言葉を世間話のようには明るくまた淡々と語る姿に頭が下がり、雑念に浸食された自分のたましいが清められるようであった。

彼女の内観を担当した長島先生からは、「内観は死をみつめてするものです。」という吉本先生の言葉をひきながら、死に関連して内観を受けた方々の例、そして最近話題になることの多い臨死体験が内観そっくりであるという深い意味を含むと感じられる話題が提供された。

これらの話に感銘を受けながら、内観とは絶対者との赤裸々な関係における自分とでもいうものに触れる体験なんだと改めて感じ、三年前の自分の集中内観の浅さを再認識させられた。

ここに参加することにより今回も幾つかの貴重な出会いがあった。内観を通して知り合った、自分を刺激し高めまた安らぎを与えて下さる多くの方々にとこころから感謝しつつ帰途について。

【随想】

内観との出会い

弘前・親子内観研修所 竹中哲子

死の恐怖に襲われてしまう病名を担当医から告げられたときの衝撃を、今でもことばにするのはむづかしい。当時の私といえば、そんな病が世の中にあることくらいは知ってはいたが、自分自身にはおよそ関係ないものとして生きてきた。体育教師として健康にだけは自信があったからである。その私に病は突然襲ってきた。

そして、手術の日、亡き母(姑)に万一に備えて、命の引き取りを頼んで、私は手術室へ向かった。その手術室での夢と思われるが、黄色い菜の花が咲き乱れる広い野原で、母の迎えをひたすら待っている自分の姿があった。

麻酔から覚めたときに、まず、心に浮かんだのは「まだまだやり残したことがある」という思いであった。死を覚悟していた私にとって、

麻酔からの覚醒は、まさに再生として感じられた。この命を導いてくれたのは母である、という気がした。

三ヶ月後、とりあえず職場に戻ったが、



吉本キヌ子先生を
内観研修所に訪ねて

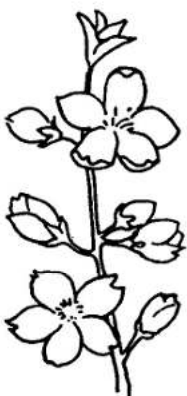
体力の衰えはともかく、気力の減退はどうしようもなかった。教職を続けるかどうか、結論を出せぬまま北陸内観研修所を訪ねていた。

内観するため屏風に入ったままではよいが、母に対する自分を調べることに、今現在の自分の悩みとどのように関係があるのか疑問が湧いてきた。過去を振り返れば、母親に対する不満や怒りがこみあげてきた。それでも面接者の適切な助言に導かれて、気持ち落ち着いて、徐々に内観に取り組めるようになってきた。長い間私は「兄や弟だけが愛されて、自分は全く愛されていなかった」と思っていたのが、内観をしてゆくとそれは自分の誤解であり、思い違いによるものであったことに気付かされた。

内観を通して母から受けた数々の愛を発見してみると、長く子供のころから胸に支えていたわだかまりが不思議と消えていった。そして、身も心も軽くなってゆくのが分かった。

生まれてから今日まで両親はもとよりであるが、数え切れない方々の恵みをいただいで自分が存在していることを実感した。もっと言えば、生きているというより生かされている。「尊い命」を感じさせてもらっている。私の人生における「危機」を内観が救ってくれたわけであるが、今は亡き四人の親は人生の羅針盤として私の心に生き続けている。

内観とめぐりあって私の人生は大きく変わった。その後、吉本キヌ子先生のご指導を受けつつ内観研修所の開設に踏み切った。そして、現在、内観者の方々から、家族の絆や親子関係について教えられることが多い。今後は、心の安らぐ研修所として気軽に利用していただけるように工夫してゆきたい。



日本内観学会学術誌

「内観研究」 発刊について

編集委員長 横山茂生

日本内観学会では第15回大会において学術雑誌委員会が設置されて以来、学術誌の発刊に準備を重ねて来ました。この間に編集委員（伊藤研一、巽信夫、真栄城輝明、堀井茂男、横山茂生）で協議を重ね、雑誌名も「内観研究」として間もなく創刊号（第一巻一号）が学会員の皆様にお届けできるところまで漕ぎつけました。

この「内観研究」誌は当分の間は、年一回発行の予定ですが、内容は特集し創刊号は「家族と内観」と原著論文を中心としたものになる予定です。内観学会会員の皆様からの論文の投稿を大いに期待しています。詳細な投稿規定は本誌に掲載いたしますが、原著論文は四〇〇字詰原稿用紙三〇枚以内（図、表などはそれぞれ一つにつき原稿用紙一枚分とします）とします。奮ってご投稿下さい。なお事例を投稿される場合はプライバシーの保護に留意して下さい。

また編集委員会の方から論文執筆をお願いする場合もあると思います。その際はご協力をよろしくお願いいたします。

原稿送り先 〒七〇一〇二 倉敷市松島二八八

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

横山茂生 宛



【予告】

第七回内観療法ワークショップ・関西

ワークショップは初心者にとっては内観への入門になり、経験者にとっては内観への理解が深まると好評ですが、今秋は関西で開かれます。会場は京都と奈良の県境の緑豊かなところで、古都の散策もかねてご予定いただければ幸いです。

【主催】 日本内観学会

【日時】 十月二十一日(土) 十三：〇〇

二十二日(日) 十二：四十五

【会場】 京都厚生年金休暇センター（予定）

【募集人員】 一五〇名

【参加費】（研修費・宿泊費・食費を含む）

一般参加者 日本内観学会会費 一九、〇〇〇円

学生 一五、〇〇〇円

部分参加 一日 五、〇〇〇円（研修費のみ）

【プログラム】

① 選択するものへA「内観入門」か（シンポジウム）「健康と内観」

B「内観実習」か「ナイトセミナー」、C「体験発表」か「事例検討」

② 共通するものへ（シンポジウム）「教育と内観」と特別講演

「建設的生き方」D・レイノルズ

【事務局】 大阪大学人間科学部教育心理学研究室、第7回内

観療法ワークショップ準備委員会（☎五六五 吹田市山田

丘一〇二）☎（〇六）八七九一八一〇五

【申込】 五月以降にプログラムと参加申込書を配布いたしますので、八月末までに参加費を添えて申し込んで下さい。

「自己発見まつり・町田」の印象記

ハートセンター楠心理研究所 楠 宏 太 郎

「自己発見まつり・町田」と題した内観者のための集まりが四月一日～二日、昭和薬科大学で開催された。この集まりでは、内観ロールプレイングと呼ばれる新しい内観手法が参加者に紹介された。これは、楠正三先生が発案されたものである。

今回の「自己発見まつり・町田」の参加者はスタッフを含めて二十一名だった。まずはじめに新聞の人生相談をみんなで読み、その相談者の立場になりきるといふ心の作業を行った。心の中である人物の人生をそのまま演じてみる。そこにはもちろん空想が入るし、自分自身の偏見も入るが、とにかくそれを演じてみる。すると、自分自身の内観よりも容易に内観でき、しかも内観の結果を臆することなく人に発表することができる。

夕食後のセッションでは、内観ロールプレイングで高まった熱の冷めぬ中に、各自が部屋に一人でこもって内観する機会をもった。参加者は、事前に内観のための過去のエピソードを文章にして持参するよう求められていた。

面接者の役割は内観ロールプレイングを行うことである。つまり、内観者エピソードを読んで、内観者の人生を心の中で演じてみて、面接者自身も内観者と一緒に内観を演じる。

その後、石井光先生の司会で内観ロールプレイングについて話し会った。多くの人々がすすんで自分のエピソードを紹介し、こうしたグループ活動が内観を深め、また継続するのに役立つだろうと語った。話題は内観全般のことに広がり、さまざまに質問や意見がだされた。話し合いはそのまま自由参加の酒宴に持ち越された。場は大いに盛り上がり、最後まで残った人々が床に着いたのは午前二時半だった。

次の日のセッションは、楠正三先生の指導で三十分間のヨウガを行い、三つのグループに分かれた。そこで、一つのエピソードを基に内観ロールプレイングをするのが課題であった。

与えられたエピソードは、間違えた薬をもらった患者のもので、その内容は怒りに満ちていた。その怒りの体験について内観するのであるから、課題としては非常に困難である。にもかかわらず、エピソードの登場人物である薬剤師や医師に対しての内観が割とすんなりすすんでいった。内観しているうちに、薬剤師の果たしうる役割や医師のあり方、患者のあり方など、幅広い洞察が副産物として得られた。

その後再び集合し、各グループで話し合われたことが発表された。各グループともにエピソードの患者が今後どうしていったらよいかという点で同じ結論を出したのが印象的だった。

人生をドラマと考えると、それは喜劇ばかりでなく、多くの悲劇を含んでいる。人は時に怒りと悲しみに満ちた悲劇を演じざるを得ないために、悩み苦しむ。内観ロールプレイングは、他者を演じて内観することにより、自分の演じている人生ドラマをすべて受入れ、悲劇は悲劇として楽しむ術を身につける方法であるといえる。「自己発見まつり・町田」は内観者がそんな人生のドラマを持ち寄って一つの劇場をつくり、そこでさまざまな役回りを楽しむお祭りであった。



昭薬会館前に揃った参加者

【内観研究】

『内観中にみられる退行と同一化について』

村井病院 中島 武志

(はじめに)

内観が心身ともに「癒し」をもたらせてくれることは周知の事実である。一体どんな心の作業をするのだろうか。我々は実に数多くの心の作業に関する知見を得てきた。これらの言葉をもって説明できることなのだろうか。それとも内観「型」特性があるのだろうか。或る症例を例示する。

彼は典型的な内観はしていないのだが、集中内観として知られる形式は踏まえており、(ここに大きな問題が横たわっている。即ち、形式を踏まえてさえいれば真の内観がなされたといえるのだろうかという。)その際に行われたであろう一連の心の作業をよくみせてくれた。

(症例と内観の特徴)

内観をされた方は既に老人期にさしかかった男性である。人生の半ば以上を躁うつ病という精神病と闘い、しかも入院が長きに渡った。若い頃ある医師と出会い、勧められて内観を知り、故吉本伊信師のもとで集中内観を指導されている。以来、事ある毎に自ら求めて内観を繰り返し続けた。その際、一人になれる場を提供すること、彼の告白を聴いて書き残すことが我々の仕事であった。

特徴としては、形式は集中内観のものであるが、期間が別々であること、三つのテーマに即して告白がなされるが、決まった時代(小学生時代)の昔話しを聞かされているような話しぶりに終始すること、現在関係している人々への評価がしきりに混じること、テープをよく聞くこと、何よりも内観を求めるときが大抵決まっています、軽躁状態と呼ばれる病期で、対他トラブルを生じた後であることである。

(症例を通して考えられたこと)

一、退行について

軽躁状態という時には、抑制がとれて一種の退行を示すことがよくあるが、一人きりの個室に閉じこもり、一番多く思い出のある時代に絞って内観することで一層退行が促される。結果としては一種の現実逃避がはかられる。ここで現実とは、トラブルを起こした現実と、或る病状を発している自分という現実の両者であろうか。気分的に楽な状態が招来される。注目されたのは、退行の程度で、周囲の我々にとっても全く問題を感じない程度といわばちょっとした退行であることで、どこかで歯止めされて、とても具合良く退行されるといった印象であったことであった。

二、自己愛的同一視(エーリッヒ・フロム)について

常に同じ対象に限られて、しかも同じ時代のことのみに集中する結果、極めて特有な感情が表明される。懐かしい、とてもゆつたりした、自分は悪いことをした人間だがまわりの人々により許されていたということとを認めた時にかもされる感情。加えて昔の話しの途中で最も近い現在の人々に対して同じ感情が抱かれていくことが表明される。ここでなされる作業は、一つは明らかに過去になされた同一化の再確認、強化の作業である。一種美化された過去が作られるといってもよい。そして注目すべきは、そうすることで自分というものが鮮明になってゆく。現在の自分が強化される。もう一つは、昔と全く同じ様にして現在の近しい人々と同一化を起こすこと。これが現実の人間関係を良い方向に向けてくれる。フロムは例え幻想の世界のことであれ、真の他者愛の基を形づくる、自己の裡なる基本的信頼感と深く結びついたものとして、自己愛的同一視をとらえた。まさに内観により、この意味の自己愛を確認することができたといえよう。

(後記)

本論文は、第十七回日本内観学会において発表された「内観への期待を強く示す一例を通して型というものを考える」と題された論文の要旨をぬき出したものである。

【中国の内観講演旅日記】

中国に内観療法の灯がともる

(財) 慈主病院 堀井茂男

中華医学会行動医学会第三回大会(中華医学会行為医学会第三回大会)が、一九九四年十月五日〜九日にかけて、中国は湖南省張家界市(前大庸市)で開催された。その参加報告と私達を招待してくれた上海第二医科大学王祖承教授のもとで、中日連合内観療法研究会ができていることを日本内観学会の皆さんに報告したい。

内観に関しての中国との交流は、一九九二年に、上海第二医科大学 王祖承精神科教授の招待を受けて、信州大学 巽信夫先生とひがし春日井病院 真栄城輝明先生が訪中したことに始



全国行動医学大会の開会式(右から2人目が筆者)

まっている。二〜三年に一回開催される華東精神医学会第七回大会がこの年に上海精神衛生中心において開催され、兩名が森田療法と内観療法について特別講演を行い、反響を呼んだということである。先の医学会が華東地区のそれであったのに対し今回は全国大会としての医学会であった。この医学会の運営委員でもある王祖承教授が今回も招待をして下さったが、巽信夫先生の都合が悪く、堀井と榛木美恵子さんが参加させて戴だい

たわけである。

さてこの中華行動医学会であるが、まだ第三回と歴史が浅く、演題には神経症、精神病、自殺などのほか、高血圧症、胆石症などの文字が散見され、演題名から推測すると、心理・環境要因やストレスが関与している疾患に関する学会で、精神・神経疾患だけでなく心身症・その他の一般内科疾患も関連しているのではないかと思われた。行動療法が主体というのではもちろんない。今回の学会の名誉会長(名誉主任委員)は湖南医科大学精神科 揚徳森教授、本年度第三回の会長(主任委員)は上海医科大学心臓血管科 揚菊賢教授であった。本学会の第一回は天津市、第二回は青島で、そしてこの第三回が観光都市として売出し中(?)の張家界市で行われた。

学会の第一日から私達は参加した。第一日の全体会は午前八時からで、開会の挨拶は揚菊賢教授、続いて揚徳森教授が本学会のあらましを説明した。それによると中国全土から集まった演題総数は六〇〇以上にのぼり、その中から約三〇〇演題を選択、本学会への参加資格となった。(ちなみに、発表資格を得たのはそのうちの三〇題に絞られた。)中国では学会参加が自由ではなく限定されるらしく、その影響もあってか会場は熱気があふれ、参加者の勉学への意欲が感じられた。本会への参加者は、遠くはモンゴル、チベットからの者もいたらしい。

続いて九時三十分より課題講座として、揚菊賢教授と揚徳森教授の特別講演があり、午前十時四十五分から一般講演が行われた。午後からは三会場に分かれての一般講演で、夜もまた一般講演があった。遅れてくると思われたのだろうか、私達の講演は夜の部の午後八時から九時に予定されていた。

私達の講演は、榛木さんが吉本伊信の生い立ち、内観の確立まで、真栄城先生が内観の概観を、私が内観療法の効用の実際と絶食内観療法について、三人で分担して発表した。持っていた資料やプリントは瞬く間になくなり、中国の医師の新しい知

識への意欲には驚かされてしまった。講演後、日本語で話しかけてくれる方もおり、名刺を戴いた人もいる。機会があれば何かまた協力をと思いいたった次第である。

特筆すべきことの一つに、一般講演の中に内観療法についての発表があったことがある。湖州市精神病院 周徳平先生のもので、内観療法がどの程度知られているかなどについての調査結果であった。それによると八〇%以上が内観療法や森田療法を知っているということで、日本の精神療法が注目されていることがうかがわれた。その他の発表でも都市部と農村部の疾患や生活レベルの差についてなど興味ある発表がみられた。ただ、講演資料は各自作ってきているものの、スライドの使用やプログラム・抄録集などが整備されるまでには至っていないようで、情報処理的機能はこれからの問題であろうと思われる。また、学会は五日間あるが、うち二日間は観光にあてられており、日本の昔の学会ののどかさを連想させられた。学会場一帯は武陵源と呼ばれる観光山岳地帯であり、急峻な山岳で有名な張家界、巨大な鍾乳洞黄竜洞がある。

湖南省はおおよそ揚子江中流の武漢の南のあたりと言えはいいのだろうか、上海からは飛行機で長沙で乗り換え、張家界空港までまた飛行機である。その飛行機が一週間に一便しかなく、帰りは車一台借り切ったの長距離ドライブとなった。道中の話はさておくとして（話せば長くなるので）、一泊して長沙に着くとすぐに上海へ飛んだ。翌日が、もう日本に出発する日となっ



中日連合内観療法研究会が上海精神衛生中心に誕生した

ており、王教授の勤めている上海精神衛生中心の見学もキャンセルとなり、慌ただしく日本へ帰ることとなってしまった。長沙からの機内は王教授と一緒にあり、中華行動医学会のことや上海における内観の話もお聞きした。王教授と周先生は日本の内観研修所を見学しており、病院のスタッフと集中内観を準備しているということであった。驚いたことは、上海には既に中日内観友好協会があり、王教授がお世話をしていただいているということであった。上海に見送りに来てくれた王教授はその友好協会「中日連合内観療法研究会」の旗を持参され、皆で記念写真を撮ることになった。王教授らのやさしい顔を拝見しながら、友好協会というのは片方の国だけでは成立しないのではないかと、早く日本にも作らなくては…と考えたり、日本内観学会の国際部門があるのだから中国友好部門をそこにに入れてもらえればいいのかと思いが巡っていった。いずれにせよ平成七年度の運営委員会を考えて戴ければいいのではと考え、名残を惜しみながら中国上海空港をあとにした。

そして、新年に王教授から手紙が来た。上海で内観療法を初めて施行しているのだということが書き添えてあった。中国に本当の意味で内観療法の灯がともったのである。将来に向けて日中の内観療法の交流が、発展することを祈りたい。



開会式に臨む大会役員の面々



中国全土から選ばれた大会参加者

第十八回日本内観学会大会の開催迫る！

大正大学（東京）を会場に、本学会の第十八回大会が五月二十六日から二十八日まで開催の予定である。大会準備委員会（村瀬孝雄委員長）によれば、総合テーマは「治療技法としての内観」。シンポジウムは二つの予定されており、その一つは総合テーマがそのままシンポのテーマになっていて、山本玉男氏（藤枝市立志太総合病院）、喜多等氏（丘の上病院）、伊藤研一氏（大正大学）によって、「治療技法としての内観」の有効性や限界についての突っ込んだ検討が期待される。

また、もう一つのシンポジウムでは「内観を内と外から考える」というテーマが企画され、興味を引く。シンポジストにはジャーナリストの立場から元読売新聞記者で「禅と内観」の著書もある村松基之亮氏をはじめ、森田療法場の立場から森田療法学会常任理事を務める精神科医の近藤喬一氏、さらに、統合的心理療法の立場から臨床心理士の村瀬嘉代子氏の三氏を迎え、一方、本学会からは米子内観研究所の木村秀子氏と精神科医の草野亮氏が指定討論者として出席し、上記のテーマが活発に論議されることが期待される。

本大会の特別講演には「医の倫理の現在」と題して、柳田邦男氏が話される予定。事例検討会では「女性過食症」について、児童精神科医として高名な小倉清氏をコメンテーターに招いて行われる。その他、今回は「小講演と対話」が企画されており、注目される。そして、何と言っても、一般演題は大会のメインプログラムであるが、伊藤研一事務局長によれば本大会でも二十三の出題が予定されているという。



編集後記

一体、この国はどうなっていてゆくというのだろうか？

教育の場で発生した「いじめ死」に続いて、阪神大震災が襲ったかと思えば、地下鉄サリン事件とオウム真理教によってこの国が、世界の注視となってしまった。この事態を「あいまいな国だから」と笑って済ますわけにはいかないであろう。

本学会の会員でもある土屋守氏は、現在「いじめ問題」にもっとも真摯に、そして精力的に取り組んでいる精神科医であるが、単に専門家としてだけでなく、いじめを受けた娘の父親として奮闘された経験を併せもった方である。

本紙に寄せられた「いじめと内観」を、本学会の内に止どめず教育界はもとより、多くの人に読んでもらいたいと願う。最後に、今号もまた、たくさんの方の協力者に支えられて出来上がったことをお知らせし、感謝したい。

（真）

広報部編集委員

青山学院大学 石井 光

ひがし春日井病院 真栄城輝明

原稿の送り先

〒四七 愛知県春日井市下原町字萱場一九二〇

ひがし春日井病院内観療法室

TEL (〇五六八) 八二一五五〇〇

FAX (〇五六八) 八二一〇六七九

「日本内観学会事務局移転」

三木善彦事務局長の大阪大学への異動に伴ない、事務局も移転しましたので、お知らせします。

★新事務局

大阪府吹田市山田丘一―二 (☎五六五)

大阪大学人間科学部教育心理学研究室、

日本内観学会事務局

(電話) 〇六一八七九一八一〇五